



目次

巻頭言

(実用英語教育学会会長 柴田晶子)

第2回研究大会について

基調講演 「これからの日本の英語教育—激動の時を乗り切るために—」

石塚博規 (北海道教育大学 旭川校 教授)

発表 1 「英語で発信できる生徒の育成—地域に根差した小・中連携教育—」

道源由加里 (厚真町立厚真中学校 教諭)

友井貴子 (厚真町立厚南中学校 教諭)

秋山敏晴 (北海道工業大学 教授)

発表 2 「プレゼンテーションが英語指導の方法として持つ魅力と力」

山崎秀樹 (北海道千歳高等学校 教諭)

発表 3 「中高年・高齢の英語学習者—背景と実像」

山田 晃子 (札幌静修高等学校)

英語非常勤講師, 英語教室LaLa主宰)

フォーラム 「ビジョン5-16の具体化のためのSPELTならではのコラボレーションを 目指して」

シリーズ 「小学校からはじまる実用英語教育」 久野寛之 (北海道文教大学 教授)

お知らせ

巻頭言

SPELT 新たなる一步を踏み出して

実用英語教育学会会長 柴田晶子
札幌大谷大学社会学部 教授

交通網を分断するほどの暴風雪に繰り返し見舞われた北海道にも、遅ればせながら、そして、かすかながら、春の足音が聞こえて来るようになりました。*SPELT Newsletter* 第3号をお届けするに当たりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

2011年2月の発足以来、この実用英語教育学会(The Society of Practical English Teaching)は、小学校から成人教育に及ぶ広範なレベルで、実用英語教育の質的向上と会員相互の研究の発展を目指して活動を続けて参りました。その歩みは未だ遅々としており、まだ英語教育界に一石を投じられるほどの大きな成果はあげられていないのが実情です。しかしながら、この2年余りの間、会員数の少ない「ひよっこ」学会が、何とか年各1回の紀要発行と大会の開催に漕ぎつけ、今年度はさらに研究会も開催することができました。これもひとえに、会員だけにとどまらず、英語教育に関心を寄せる多くの方々から、ご支援・ご協力を頂いたお蔭と心から感謝申し上げます。

いろいろな立場で英語教育に関わる人々が、それぞれが抱える課題や問題点を吐露し合える場を提供すること、忌憚なく意見を出し合える場を提供すること、お互いの実践から学びあって地に足

の着いた解決策を導き出せる場を提供すること、これらのことを念頭において「敷居の低い」学会運営に努めて参りました。僅かずつながら会員数も増えつつあります。その会員が英語教育の対象としているのも、小学生から高齢者までと多岐に渡っています。知る機会の少ない、他の年齢層を対象とした英語教育の実際を知ることができるのも、この学会の大きな利点と自負しております。ここから得られる情報は、日々の自らの実践を振り返る上で、自らの洞察に奥行きを与えてくれる貴重な財産と言えましょう。

来年度より、これまで様々な立場で幅広く英語教育に関わる実践を積み重ねてこられた、行動力あふれる元・北海道千歳高等学校長の釣晴彦先生に会長をお引き受け頂くことができました。SPELTが、釣新会長のもとで、更なる一步を踏み出せる年になることを確信しております。

力不足でSPELTの飛躍のための土台作りが十分にできなかったことをお詫びしつつ、それにもかかわらず、皆様からのご支援・ご協力により、大過なく(願わくば?)ここに職務を終えることができますことに心から感謝の意を表してご挨拶とさせていただきます。

第2回研究大会について

平成25年2月16日(土)札幌大谷大学において、第2回研究大会が開催され、大学・高校・中学校・小学校・英会話学校などで英語に関わっておられる多くの方にご参加頂きました。本大会では、アジアの最新の英語教育事情から、日本の英語教育の課題と今後についての基調講演、そして3つの研究発表— ①厚真町厚真中学校と厚南中学校での小・中連携 ②高等学校における英語プレゼンテーションの魅力と効果 ③中高年・高齢者の英語教育の現状、といったテーマでの研究報告がありました。

また、久野寛之先生(北海道文教大学)のコーディネートによるフォーラムでは、参加者が、与えられた英語指導案をそれぞれの現場で使うことを想定して意見交換を行い、お互いの英語教育現場の状況を知る貴重な機会となりました。

本ニュースターでは、基調講演および研究発表をいただいた先生方に、その時の内容をまとめていただきました。

< 基調講演 >

これからの日本の英語教育—激動の時を乗り切るために—

北海道教育大学 旭川校 教授 石塚博規 先生

内閣府国家戦略室(前政権)の重点施策の一つに「グローバル人材育成戦略」と言うのがあります。グローバル人材の要素として、英語力の高さが掲げられ、TOEFLやTOEICなどの結果をその指標としています。2010年の統計で、日本は、TOEFLが世界163か国中135位、アジア30か国中では27位と確かに不振です。また、IMD(スイスの研究教育機関)の世界競争力ランキング(2011年)調査でも、全分野の平均では、59か国・地域中26位ですが、「外国語のスキル」が58位と世界で最下位から2番目となっています。TOEFLの平均点の低さ(日本の平均70点)は、近隣アジア諸国・地域にかなり水をあけられ(台湾74点、韓国・香港81点)ています。受験者数の人口比が違うという反論がよくなされていますが、実は人口比においてもこれら国々・地域の方が高くなっています。10万人中の受験者が韓国212人、台湾114人、香港106人に対して、日本は65人となっているのです。「グローバル人材育成戦略」はこの現状を打開するために、「初等中等教育段階の実践的な英語教育の抜本的な充実・強化」、2004年度から減少傾向が顕著な「留学生数の大幅な拡充(全学生数の10%)」、英語教員の英語力の向上を謳っています。英語教員はTOEICを必ず受験しスコアを報告

しなくてはならないなどとの案まで出ている状況です。

文部科学省の平成22年の調査結果によると、旧課程の「オーラル・コミュニケーションI」で、ほとんど英語で授業をしたという教員は19.6%にすぎず、半分以上を英語で行った教員も32.8%だといいます。どうしてカリキュラムが変わってもこのように授業がコミュニケーション重視とならないのでしょうか。原因は大きく、三つあるのではないかと考えます。

- ① 英語担当教員の英語力不足
- ② 変わらない大学入試とセンター試験
- ③ 英語教員の文法指導と逐語訳に対する根強いビリーフ

私は、昨年度英語教育の実態調査と授業観察のため、上記の「アジア英語先進地域」の訪問を行いました。台湾(台北市)では小学1年から英語の授業が始まり、小3から小6まで週2時間、韓国では小3~4で週2時間、小5~6で週3時間となっています。香港は小1~6まで週8時間程度、国語と同じ程度の時間が取られています。方法論もそれぞれの国で少しずつ違い、台湾はどちらかというとteacher-centeredで、韓国はグループワークなども取り入れられたstudent-centeredな

要素があったように感じました。香港では小1から徹底的なフォニックスとリーディングです。しかし、これらの地域で内よりも強く感じたのは、これらの地域の教育養成学部の学生、そして小学校教員の英語コミュニケーション力の圧倒的な高さでした。ネイティブスピーカーがもはや不要とも思われるほど、英語コミュニケーション能力が高くなっており、教わった子供たちがそのような教師から学ぶことで高い英語力を獲得するといった好循環が生まれつつあるのを感じました。すでに日本とアジアの英語先進地域では、かなり英語力において格差が生まれつつあることが確かである危機感も感じました。

私たちはこのようにすでに大きく英語力でハンディを背負っている日本の若者たちの現状をどう

やって打破していけるのでしょうか。カギは「インプットをどうやって確保するか」にかかっているのだと思います。そのためには、自律的学習者を育て、教室外でも英語を積極的に使い、学習していく高い動機の子どもたちを育てていくことが大切です。そのためには、中学校や高校で日本語で行う長々とした文法説明はやめなくてはなりません。

世の中が急速にグローバル化し、近隣諸国が着々と高い英語コミュニケーション能力を身につけた若者たちを産み出している状況を直視し、今後の日本の英語教育がどうあるべきか、中・高校で身につけた英語力を将来どのように何のために使うのかといった問いへの解答を我々一人一人が持たなくてはならないのだと思います。

< 研究発表 >

発表1：英語で発信できる生徒の育成 - 地域に根差した小・中連携教育 -

厚真町立厚真中学校 教諭 道源由加里 先生
厚真町立厚南中学校 教諭 友井 貴子 先生
北海道工業大学 教授 秋山 敏晴 先生

1. 厚真町の英語教育

厚真町では、町内の二つの小学校が文部科学省から研究指定校（教育課程特例校）に認定されたのを受け、教育委員会に小学校、中学校、高等学校の英語教育担当者からなる「英語教育推進委員会」を設置して、「国際化時代に必要なコミュニケーション能力の育成」をテーマに、町全体で英語教育に取り組んでいます。

具体的内容としては、「小学校低学年段階からの『外国語活動』の実施に伴う、教育課程のあり方、その指導法、及び評価の研究」と「『外国語活動』と中学校英語におけるコミュニケーション活動との接続のあり方の研究」の二つであり、授業研究を中心とした研究が進められています。

2. 小・中の連携

同町において、小学校の外国活動担当者や中学校英語教員が相互に学校を訪問し合って授業参観

を行う「情報交換」は日常的に行われており、また、授業研究を中心とした「交流」も定着しております。更に、小学校、中学校の英語教育において目標や指導法、学習内容の整合性を図る「カリキュラムの連携」に向けた取り組みが始められています。

3. 中学校のコミュニケーション活動

小学校の英語活動において養われた「コミュニケーション能力の素地」を活かし、「コミュニケーション能力の基礎を培う」中学校段階においては、何と言っても多彩なコミュニケーション活動に取り組みせることが肝要です。同町においては、「聞くこと・話すこと」を中心とした「スキット、英語劇、地域発信」に全中学生が取り組んでいます。

3-1. 「英語劇」の取り組み

2年生では、「桃太郎」を題材に、ALTとJTEが協力を得て作り上げた台本で、生徒たちが声に変

化をつけたり、ジェスチャーを加えたりして準備し、発表会を行います。

3年生では、「ピーターパン」、「白雪姫」を題材に、台本の一部をALTの協力のもと生徒たちが作成し、準備して発表会に臨みます。

生徒たちは、取り組みを通じて、劇を見ている人に伝わることを意識するようになり、成果を上げることができました。

3-2. 「英語で厚真町をPRしよう」の取り組み

1年生では、「英語で厚真町をPRしよう」の前提として、「興味のある街・地域・国を英語でPRしよう。」に取り組みます。この活動には「総合の学習の時間」を充てます。

2,3年生では、厚真町の自然、産業などを調べ、外国人に「英語で厚真町をPRする」活動に取り組みます。発表会においては、近隣から多くのALTを招待し、生徒たちが、個々に、調べた街の自然や産業の様子を英語で伝える活動が展開されました。初めて会うALTの方も多く、厚真町の話からALTの出身地へと話題が広がり、充実した活動となりました。

4. 今後の展開

今後は、活動の一層の多彩化を進めると共に、コミュニケーション能力の育成の視点から小・中の活動の関連を精査することが大切であると考えられます。
(文責/秋山敏晴)

発表2：「プレゼンテーションが高校英語指導の方法として持つ魅力と力 Autonomic Life-Long Learners を育てるために」

北海道千歳高等学校 教諭 山崎秀樹 先生

高校の英語教員として常に意識していることは、「英語があまり得意ではない、もしくは英語を大きなニーズとして感じていない生徒の意欲を向上させ、学習者のニーズを創り出して英語を学ぼうとする仕組みをどう作るか」です。英語そのものを指導する難しさのみならず、「英語を使い、ある内容について、聞き手にわかりやすく、自分が伝えやすい方法で伝えられる力」の指導の難しさも感じています。日本語でも容易でないことを、学習の途中にある英語を使って伝える指導で有効なのが、「プレゼンテーションの導入と指導」です。本研究大会では、教科書の発展的内容で生徒中心の言語活動を創造し、生徒自ら進んで準備をしてプレゼンテーションをする仕組みを作る指導について発表しました。

プレゼンテーション指導によって生徒が身につけられる力は、授業で教科書を訳読しペーパーテストをする以上の効果があると確信しています。教科書の内容を発展させて行うプレゼンテーション指導の中に、教科書で触れる知識は十分含まれており、内容について調べ、人前で発表するという性質上、必然的に生徒は教科書の内容以上のもの

のを必要と感じて学び始め、教師はそのサポートをするのが役割になるからです。

プレゼンテーション指導で生徒が身につける力：

- ①コミュニケーション能力：言語運用能力・表現力・説明責任・論理性・提案や説得をする工夫
- ②情報処理能力：テキストの理解・情報検索・調査・データ活用・根拠・問題解決能力
- ③マネジメント能力：チームワーク・協働・リーダーシップ・責任感・計画性
- ④心理的効果：探究心・知的好奇心・モチベーション・学ぶ意味・エンタテインメント性

例えばオーラルコミュニケーションの教科書によく見られる、「買い物の場面の会話」は、私の授業では「CM作成」を導入し、教科書にある「買い手目線」ではなく、「売り手目線」で行います。エンタテインメント性を重視しますので、生徒はチームで楽しみながら作業し、ユニークなプレゼン(CM発表)を完成させます。売り手になる事で、その商品のメリットや利点、色・形・サイズ・特徴などを強調し、セールストークやキャッチフレーズなどで買い手を「説得しよう」とします。そこにまた違ったコミュニケーションの工夫が発生するのです。言うまでもなく、教科書のフレーズの暗

記や聞き取り、商品の描写の英語以上の能力と知識を身につけます。

6年間勤務した北海道清里高等学校は、全校生徒が100人未満の小規模校で、様々な進路希望のニーズがあるため、「全員が参加でき、満足できる英語の授業」を目指しました。少人数（最大でも20名）の授業では「大判の＝易しめの」教科書を使用し、始めのSMALL TALKで生徒全員が対話し、英語で基本事項を学んだ後、教科書のトピックを使ったプレゼンテーション活動を機軸に授業は進みます。まじめで一生懸命で、間違いを恐れず、物怖じしない生徒のプレゼンは生き生きとしており、クラス全体が楽しめる和やかな雰囲気がありました。

実用技能英語検定をスケールにして成果を測定するならば、2005年の赴任時、100名の生徒のうち、英検3級が7名のみだったのが、2年後には3級24名、2級が4名、準2級が7名に増加、2008年には準1級合格、2級も常に3名以上、準2級も2009年には2桁に増えました。センター試験の英語でも6割から8割得点できる生徒も出てきました。授業では英語検定対策、受験対策は一切せず、生徒中心の言語活動を行った結果、生徒の英語や海外への興味関心は高まり、英語を使えば楽しめるという生徒が増えました。また、清里町の短期語学研修や交換留学制度を授業に関連付け、友好都市の訪問団の歓迎会を行うなど、小さい町、学校でありながら、常に異文化や海外に触れられ、学校全体にその雰囲気を波及させる副次的な仕掛け作りも功奏しました。

Daniel Pink(2009)は、内発的動機付けが最も発揮されるのは、自律性(Autonomy)、熟達(Mastery)と目的(Purpose)が存在する時だと主張しています。プレゼンテーション活動の導入には、生徒が自由にプレゼンを構築できる「自律性」があり、

「友人や先生を驚かせよう、うまくやろう」という「熟達」への欲求、そして、「楽しみ、楽しませよう、達成感を得よう、英語がうまくなりたいたい」という「目的」を含み、Pinkの主張する新しいモチベーション（「モチベーション 3.0」）を学習者の中に育てる条件がそろっているといえるでしょう。また、Pinkによれば、従来の「アメとムチ」のモチベーションは創造性を阻害し、他人依存やごまかしなど負の行動を生みやすく、これを英語教育に当てはめれば、学習者が「ノルマ(学習量)を達成すればよい、合格点を超えればよい、教わったことをテストで答えればよい」というその場しのぎ的な姿勢や、「まずは語彙や文法をマスターしてから」という暗記重視の姿勢につながっている気がしてなりません。

高校では来年度から、「英語の授業は英語で行うことを基本」とする授業展開となります。高校の現場でも、「生きる力」、「グローバル人材育成」、「キャリア教育」、「世界に発信する力」、「生涯学習」などのキーワードを聞く場面も増えました。これらの教育の将来的な展望と課題に向けて、また目の前の生徒の10年先の研究やビジネスの分野での成功のためにも、英語の「4技能」に「うまく伝える力」を合わせた「5技能」とあわせて、マネジメント能力や、問題解決能力、情報処理能力を向上させる「プレゼンテーション活動」が最も効果的であると考えています。「英語だけを教えていればよい」から「英語を使って何が出来るかを示して指導する」ことが求められているのではないのでしょうか。

<参考文献>

Pink, Daniel H. (2009) *Drive: The Surprising Truth About What Motivates Us*. New York: Riverhead.

発表3：「中高年・高齢の英語学習者—背景と実像」

札幌静修高等学校 英語非常勤講師、英語教室 LaLa 主宰 山田 晃子 先生

近年、中高年や高齢の英語学習者が漸次増加していますが、この年齢層用の英語学習テキストの種類はほとんどない状態です。成人といっても年

齢層に幅があり、中高年や高齢者は若者や現役社会人とは異なった背景を持っています。彼らの背景を把握することによって、中高年・高齢者向け

の適切な体系的英語指導法を提供できる一つの重要な材料となるものと考え、2009年夏、英語教室やカルチャーセンター等の英語学習者、181名に質問紙調査を行いました。そして6W1H(who, whom, why, when, where, what, how)という要素で分析し、今回はwhom(学習者)に焦点を当て、発表させていただきました。

年齢層：調査結果では、年齢層は50～80歳代で、実年齢記入の124名の平均年齢は、65.8歳でした。今回最も多い年齢層は60歳代でしたが、年齢層が高くなるにつれて、学習者も減少しています。年齢を重ねるにつれて、自分の意思ではなく、体力や健康面の衰え、また学習者自身の周りの事情によって、学習と向き合えなくなるという現実が出てきていると言えるでしょう。

男女数の差：181名のうち、男性は42名(23.2%)、女性は139名(76.8%)という圧倒的に女性が多いという結果となりました。今回の男女比の差には、男女間に学習法の違いがあることが原因の一つであると推察しています。学習法において、女性は「教室や講座」、男性は「本などで独学」の割合がそれぞれ高いという報告(1)もあり、今回の結果においても同様の理由で男女比の差が出たのではないかと考えられます。

英語学習期間：学習期間が5～10年間の26.7%が最も多く、比較的長期間にわたって学習する傾向にあることがわかりました。学習は「継続」によって上達していくこと、またその重要性を長い人生経験から実感していることがこの長期間学習要因の一つとなっていると窥えます。そして「上達したい」、「英語が好き」という意思が学習継続の源になっていることも大きな要因であろうと考えられます。

加齢による認知の変化：肉体については、加齢に伴う視力と聴力の変化が主に学習に影響があると考えられます。指導側でこれらを補う配慮の例として、視力の面では、照明、板書の工夫、黒板の位置、字の大きさなど、また聴力の面では、声の高さ、話すスピード、良音質の音響装置や音量な

どが挙げられるでしょう。また認知・記憶力についても加齢に伴って変化が現れます。短期記憶では会話の返答、聴覚による模倣といったアウトプットにも関与し、発音や聞き取りの面で困難が生じてくると考えられます。長期記憶の面では、中高年、高齢者は長期記憶によって学習するという傾向があるので、指導者は、彼らの豊富な知識、経験、国語力を生かした指導法を提供していく工夫が必要でしょう。

受けた学校英語教育：第2次世界大戦中の教育は満足のいくものではなく、また戦後は混乱期中で行われ、その後、文学的素材で読解学習が中心の教育を受けてきたことが回答者たちの記述でも示されています。生の英語は遠い存在で、話す、聞くという訓練をほとんど受けなかったことを残念に思っている人が多い傾向にあるようです。

生活と学習意識：英語学習以外の趣味に関する記述回答結果では、162名の約70%の人が2つ以上の趣味を持っており、また55%の人が何らかのスポーツを趣味にしているということがわかりました。彼らがいかに好奇心旺盛で、活動的な生活をしているかということが示されています。趣味の中で最も多かったのが「旅行」で、これは他の世代よりも時間的な余裕に恵まれていることが誘引の一つであるでしょう。しかしその一方で、自分の健康、家族、家の事情などの不安を抱えながら学習している様子が自由記述欄から明らかになりました。そしてそこから今後の学習への姿勢として、学習者たち共通の4つのキーワードが浮かび出てきました。それは「ゆっくり」、「力まず」、「楽しく」、「継続」です。

英語学習が生活そのものを充実させ、また生きがいのひとつになっている中高年・高齢の英語学習者に対し、その意欲を尊重し、ニーズに合った指導を提供していくことが指導に当たる者の大切な役割と考えています。

(1) 高尾真紀子(2005). アクティブシニアの生涯学習ニーズ Best Value 10 2005. 9 価値総合研究所 6-11.

フォーラム

ビジョン5-16の具体化のためのSPELTならではのコラボレーションを目指して

司会 北海道文教大学 教授 久野寛之 先生

今大会では、通常のフォーラムと異なり、小グループでの参加・体験型のユニークなフォーラムを目指しました。

昨年度、第1回大会のフォーラムは、小・中・高・大の各レベルから、それぞれの〈希望〉や〈要望〉を出し合う場として一定の成功を収めたと思います。今年度は、そこからさらに一步踏み込んだフォーラムができないものかと考えました。それは楽しいものであってほしいし、できれば、だれもが躊躇せず思いつくままを語れるような場であってほしい。そんな願いを込めたフォーラムを作りたいと考えました。

そのために、《小》・《中》・《高》・《大》・《他》の5つのレベルで英語教育に携わる人、あるいは関心を持っている人たちが等しく混ざり合うよう参加者全員を小グループに分け、各小グループごとに、一つの具体的なテーマを話し合ってもらいました。この討論を通して、小5から大学へとつながる英語教育の連続を実際に連続として実現していくために必要な共同作業、コラボレーションを疑似体験しました。

具体的には、実用英語教育学会の会員から一つの教材が学会ホームページに匿名で投稿されたと想定し、その教材に、各レベルのニーズに基づいて会員同士が手を加え、小学校向け、中学校向け、大学向けにスパイラル変容させていく過程を疑似体験するという試みです。

フォーラム運営の方法としては、参加者が口で自分の考えを述べ、それで終わってしまうのではなく、このフォーラムの小グループでの意見交換を記録に残し、他のグループとの経験共有が可能になり、さらには、レベル間での相互理解を実質的に深めていくための研究を学会として進めていくことにもつながっていくような方法を試みてみました。

残念ながら、今回の試みでは、時間的な制約や

司会者の不手際が重なって、今後の研究のために十分な分量の意見交換の記録を残すまでには至りませんでした。しかし、3つの小グループに分かれて大変有意義な話し合いの場を持つことができたこと、参加者の一人として感じました。各グループで行われたのは、一般的な議論ではなく、具体的な授業活動をどのようにして各レベルにふさわしい内容のものに変えていくかという話し合いでした。そのような具体的な話し合いを繰り返していくことによって、各レベルの実態やニーズを詳しく具体的に理解し、小学校から大学への英語教育の強い連携を築き上げていく——そういう連携構築の可能性を、参加者は実感できたのではないかと思います。(当日配布したプリントを [SPELT ホームページ](#) に掲載してありますので、ぜひご覧いただき、当日の小グループ式フォーラムを追体験していただければ幸いです。)

★★★

大会案内で使った「スパイラル変容」ということばは、《小》から《大》に向けて、英語によるコミュニケーションの技能を「らせん式に高めていく」ということ意味していました。それは、限られた話題や場面だけを使って、一気に単純な英語から複雑な英語へと学習を進めていくことではありません。学習の各段階で、目標となっている英語構造を使って行うことのできるコミュニケーション活動をさまざまな話題、さまざまな場面で何回も行い、それによって子どもたちが自信をもってこなせる話題や活動の種類が徐々に横に広がっていく。と同時に、そのような多様多様の具体的なコミュニケーション活動の中で、当該段階で習得すべき目標英語構造を何度も使ってみることで、その構造に対する理解が深まり、子どもたちが、さらに難度の高い英語構造を学習できるようになっていく。こんな具合に、横と縦の広がりと同時に進むという意味での「らせん式」発展

です。現在では、英語教育を専門に学ぶ誰もが、授業における英語活動の広がりや深さ、多様性と難度をらせん状に高めていくことの重要性を認識しているはずですが、現場での実現にはまだまだ多くの困難が立ちはだかっているというのが現状でしょう。その意味で、小5から大学につながるグランドプランを理論上の青写真として確立することも大事ですが、そのグランドプランを、各レベルの現場の諸条件——学習者数、学習者の年齢その他の発達段階的諸要因、設備その他の教室の現状、家庭学習の質など——を十二分に考慮した上で各地域、各学区で具体化していくことは、さらに重要な目標です。

基調講演で述べられた隣国韓国や台湾の《英語教育先進国》に負けない優れた英語教育を実現していくために、まずは小・中・高・大の間に強力な連携を構築していくことが求められています。そのための具体的な協力、協働を作り出す上での前提となる、各レベルでの課題やニーズへの相互理解の必要性と可能性を、今回のフォーラムでの

体験を通して感じられたと思います。今後は、他の学会とも情報交換をしながら、北海道英語教育学会(HELES)が採用している『OpenPNP』というシステム（これを使うと、たとえば Facebook のようなソーシャル・ネットワーク・システムが無償で構築できる）などの活用を含め、教員間、教育レベル間での教材共有と意見交換の取り組みを支援する可能性を学会として具体的に研究していきたいと考えています。

また、今回は、前述の通り、時間的制約のために参加者に当日会場でこのプリントに記入していただける時間が確保できなかったため、ほとんど回収することができませんでした。にもかかわらず、主催者側の求めに応じて、大会終了後に郵送してきてくださった先生もいらっしゃいます。この場を借りて、心からお礼を申し上げます。こうしたフィードバックを、紀要誌上又は 10 月の研究会で、今回のフォーラムの報告としてまとめ、皆さんと共有できるようにしたいと考えております。

シリーズ 小学校からはじまる実用英語教育

久野寛之（北海道文教大学 教授）

第3回 「アルファベット」

「名前」というもの

いきなりですが、もし皆さんが、日本語を一生懸命勉強している知り合いの外国人から、こんな質問をされたら、何と答えますか。

「あ、う、どうして、『1日』は『ついたち』なんですか？『いちにち』じゃダメですか？『20歳』をだれかが『にじっさい』と言ったので、私もそう言ったら、知り合いの小学校の先生に、『それは「はたち」ですよ』と言って直されました。どうして『にじっさい』じゃダメなんですか？」

前回は数字のことで紙面を取りすぎ、アルファベットの話しをする余裕がなくなりました。そこで、あらためて、アルファベットのお話だけでシリーズを1回分取ることにしました。

さて、アルファベットを教えるときに、ぜひ、子どもたちと一緒に考えてほしいのが冒頭の質問です。皆さんは、この質問にどんな答えを出されたのでしょうか。普段大学で授業をするときと違って、このシリーズではQ&Aタイムを取ることができません。ですから、皆さんが面白い答えを持ってらっしゃっても、それを聞けないのがとても残念です。

実際、色々な答え方ができると思いますが、日本語教師としての訓練を受けていた時に教わって、「なるほどこれはわかり易い！」と思った答えは、「ついたち」というのは「1日」の名前だという答えです。「いち」という数字と「にち」という文字をただ合体させてできあがることばではなくて、日本語話者が社会的約束として決めた名前だと考え、そう教えるのです。実際、「1日」の場合は、「いちにち」というと「1日間」という意味にな

第1回： ○と×（1号に掲載）
第2回： 数と数字とアルファベット
第3回： “Excuse me.”と“I’m sorry.”

<変更後>

第2回： 数と数字
第3回： アルファベット
第4回： “Nice to meet you.”と“Good to see you.”
第5回： “Excuse me.”と“I’m sorry.”

**名前とは、一つのものに一つの音
が対応させられているもので、人
がその読み方を勝手に変えられる
ものではありません。**

り、全く違う意味を指すことになってしまいます。ものの名前は通常一つなので、「これは名前だ」と言われれば、「そうですか」と受け入れるしかありませんね。一例をあげると、「横光利一」は「よこみつ・りいち」とも「よこみつ・としかず」とも読めます。一般に、人が有名になればなるほど、その人の名前は音読みするというのが世の習いです。ですから、横光利一が近代の有名な小説家だと知っている人なら、間違いなく「よこみつ・りいち」と読むでしょうが、知らない人は、「りいち」と読んだり、「としかず」と読んだりするでしょう。しかし、「横光利一」さん本人が「私の名前は『よこみつ・りいち』です」と言えば、誰が何と言おうと、「横光利一」は「よこみつ・りいち」と読み、その本人を「よこみつ・りいち」と呼ばなければなりません。本人がそう言っているのに、勝手に「よこみつ・としかずさん」などと呼ぼうものなら、大変な失礼になります。このように、通常、名前とは、一つのものに一つの音が対応させられているもので、人がその読み方を勝手に変えることはできません。漢字を習い始めたばかりの

子どもが、「大雪山」を「おおゆきやま」と読むことはもちろん《あり》ですね。でも、大人なら、さすがの本州人でもそうは読みません。「だいせつざん」と読みます。もっとも、道産子は「たいせつざん」ですね。本州式の「だいせつ」か、道産



子式の「たいせつ」か、本当はどちらなのか、いまだ決着はついていないようですが…。

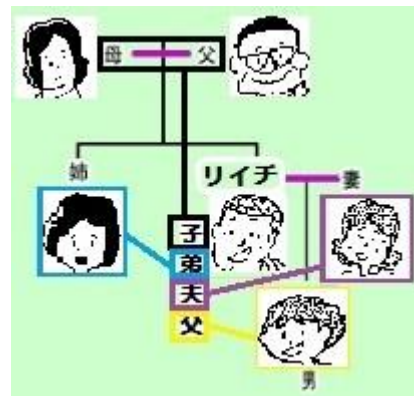
日にちに名前がつけられているという説明に比べて、年齢に名前がついているという説明を理解するのはいささか難しいかもしれません。「はた」は「二十」を表し、「ち」は「ひとつ」、「ふたつ」というときの「つ」と同じ助数詞で 20 個という意味だった、というような語源的な説明をするのが一番適切かもしれません。しかし、かりにその説明の方が正しかったとしても、やはり、なぜ「20 歳」だけそういう言い方をするのかということの説明が必要が出てきます。だったら、最初から、「20 歳」というのは特別な年齢で、その年齢に日本人は名前をつけたんだよ、と説明すれば、簡単に納得してもらえます。それが、「名前」という概念がもつパワー、説明力だと言えます。

名実ともに・・・

ことばの中には、それが名前であると理解することが必要なものがあるのだということがわかったら、子どもたちにもう一つ理解してもらいたいことがあります。アルファベットの話しはいつ始まるんだ？とつぶやいておられる皆さん、もう少し我慢して聞いてください。

先程例としてご登場願った横光利一ですが、彼の家族には、父と母、姉がいました。また、やがて結婚し、一人目の妻と死別した後に再婚した二人目の妻(千代)との間には子もあったそうです。親や妻子を持つ身の横光としては、本来「としかず」であったとしても、小説家としての知名度が上がるにつれて「りいち」と呼ばれることをまんざら悪くは思っていなかったでしょう。洞爺湖温泉の

方々も、観光客が、道産子式に「とうやに行こう」と言おうが、内地式に「どうやに行こう」と言おうが、来ていただけるのならどちらでもいいですよと思うのと同じことでしょう。このように、名前とは、本来一つで勝手に変えられないものであるにもかかわらず、結局、本人の利益や希望次第でどう変わってもいいような性質を持っています。しかし、その人が誰であるのかを語る時、名前と違って、絶対に変えられないものがあります。それが、ある名前と呼ばれている人が持っている《実体》です。横光利一は、父と母からしてみれば「子」であり、姉からすれば「弟」であり、妻からすれば「夫」、子からすれば「父」でした。つまり、横光利一は「よこみつりいち」という名を持つ、「子」であり、「弟」であり、「夫」であり、「父」であったわけです。横光利一は、自分がどう呼ばれるかを変えることはできません、家族が存在する限り、自分の実体を変えることはできません。



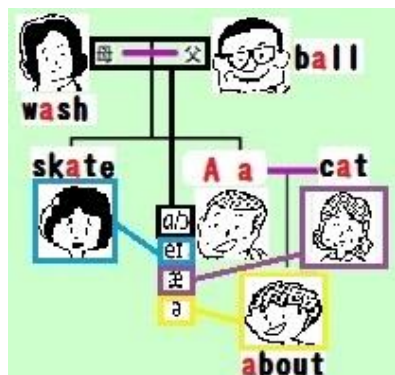
アルファベット指導で大切なことは・・・

小学校の子どもたちに「あなたは誰ですか」と聞けば、普通は自分の名前を答えるでしょうね。でも、「20 年後の自分の家族の絵」を描いてみようと言って描かせ、自分の描いた絵を持たせて、「横光君、あなたの隣にいる女の人は誰ですか」と聞けば、普通の子は、「横光千代です」などとは決して言わず、「ぼくのお嫁さんです」とか「僕の奥さんです」と答えるはず。つまり、「この人は誰か」という質問によって問われる人の素性は、名前とその実体の二つから成り立っています。そして、人の名前は一つでも、自己都合で変えることができるのに対して、人の実体は大抵複数ですが、自己都合で変えるということが絶対にできません。

この一人の人間の素性は名前と実体という二つの概念から成り立っているという事実を理解させておくと、小学校3年生でローマ字を導入する時や、小5で英語を導入する時に便利です。つまり、AやBやCなどの文字一つ一つに、名前と実体という二つの面があるということをしかり理解させておくわけです。このことは、とりわけ、“ABC Song”(「ABCの歌」)を歌わせ、歌でアルファベットを覚えさせたいと思っておられる先生方には必ず踏むべき手順ではないかと思えます。それをしないと、横光利一くんのような感性も頭脳も鋭敏な子どもは、次のように考えてしまうからです。

あれ？今さっきまで“R”は[アー-I], “I”は[アイ], “T”は[ティー]って歌っていたから必死に覚えたのに、歌で覚えた文字を使って自分の名前を書く時になると、なんで歌と違うことをするんだろう。僕の名前は「利一」だから、それをローマ字ではR-I-I-T-I って書くんだって教わったけど、R-I-I-T-I は、[アー-I-アイ-アイ-ティー-アイ]って読むんじゃないの？

「りいち」は、訓令式ローマ字表記で教われれば、R-I-I-T-I と綴り、英単語の綴り方により近いボン式では R-I-I-CH-I と綴ります。どちらで教えるにせよ、そのとき、アルファベットの各文字の名前と発音の間の違いを、人の名前と実体(人間関係によって表される複数の実体)という概念を使って教えてあげれば、子どもたちにとって腑に落ちやすいのではないのでしょうか。



「ABCの歌」で歌うのは、英語アルファベットの文字の名前であって実体ではない。単語を読む時は、英語の文字の名前ではなく、実体で判断しなくちゃいけない。これだけのことをわからせてあげることがとても役に立つと思います。

実用英語教育の観点から— 筆記体・ブロック体・アルファベット

筆記体が文字への関心をかきたてる

アルファベット指導で一番大事だと私が考えることを言い終わったので、あとは、実用英語教育の観点から、小6で英語の文字を導入する際に関心をつけていただきたいことを少しお話して、第3回目の連載を終えたいと思います。

英語がすらすら読めなくなって英語ができなくなっていく子どもたちがいます(天満, 1984; 山田・松浦・柳瀬, 1988)。その意味で、小学生のころから音声言語としての英語と英語アルファベットの文字にじっくりなじませ、中学では音と文字の関係の指導に集中的に時間をかけて、しかり学ばせたいものです。英語が読める力の基礎を中学での英語教育のはじめの時点でしかりと身につけられるよう、私たち教師が小6時点で開いてあげられる理想的な入口の一つが、筆記体なのです。

誤解の無いように付け加えておくと、ここで「筆記体を教える」というのは、英語で自分のサインを書くことができるような活動をするということで、英語アルファベットの26文字全てを筆記体で書けるようにするというものではありません。英語でサインするには筆記体が必要なので、自分の名前を筆記体で書いたり、友だちのサインを判読したりできるようになることを目標にした学習活動を行うという提案です。筆記体は、昔も今も中学で習うものですが、最近は中学でも筆記体を教えない所が増えているようです。時間がないというのが実情でしょうか。高校でも教えません。中学で教えているはずですから。それに、筆記体を教えて授業や宿題で筆記体を使わせても、読みにくい。だから、書かせない。書かせないから当然書けなくなる——そんな連鎖もあるでしょう。そのために、筆記体で英語の書けない学生が大量に存在します。ここでは、そのことの是非について議論するつもりはありません。ただ、筆記体を上手に使えば、子どもたちの英語アルファベットへの親しみが増し、その分だけ、綴り字のルールを学ぶ過程もたやすくなるようにしてあげられるのではないかと提案をしたいと思います。

筆記体の実用性

文科省は、小学校の外国語活動ではあくまで音声によるコミュニケーションを最優先し、音と文字を結び付ける文字指導は、5年生ではせず、するとしても6年生でと定めています。また、文字指導を行う場合も、「過度に文字を習得させること」を慎むように指導しています。自分の名前を英語で署名する練習をするのは、それがこの文科省の基準に照らして何ら問題がないばかりか、それが実用目的にもかなっているからです。

まず、ローマ字で名前が書ければ・・・

海外でホームステイをすると、「あなたの名前を日本語で書いたら、どんなふうになるの？」というリクエストをされることがあります。ただ、「私の名前を日本語で書いてみてくれない？」というリクエストの方が断然多く、外国の子どもたちに、名前に適当な漢字を当てて書いてあげると、読めもしないのに大喜びされます。そんなわけで、自分の名前を日本語で「北野大地」と書いて、その下か横に、「KITA NO DAI CHI」と英語で書けるようにしてあげることが大切なことです。でも、ローマ字で名前を書けるようになることの利点は、これだけではありません。

たとえば、オオタショウコさんなら、親が取ってくれた自分のパスポート上にローマ字表記された自分の名前を見て、小学校で習ったものと違っていることに気がつきます(SYŌKO 又は SYOOKO が SHOKO になっている)。また、ホストファミリーとの生活を体験して帰国したヒロユキくんは、クラスのみんなに、「あっちの人は、ひどいんだよ。ぼくの名前は Hiroyuki だってわかっているはずなのに、『へロユキ』なんて呼ぶんだから。いくらローマ字で名前を書いて見せてあげてもだよ！」と言って回るかもしれません。本人はもちろん、聞いた友だちも、これがきっかけになって、[i]の発音における日本語と英語の微妙な違いにこれまで以上の注意を向けることになるでしょう。

名前を英語の筆記体で書ければ・・・

英語でサインするとは、自分



の名前を筆記体(cursive)で書くということです。筆記体で書いた字は、そもそも読みにくいもので、ぐちゃぐちゃでもいいものなので、小学校外国語活動の精神ととても相性が良いものです。また、野球選手がボールにしてくれるサインや、ラーメン屋さんの壁なんか飾ってある、色紙に書かれたどこかの有名人のサインなど、サインは子どもたちの周りにあふれています。それだけじゃなく、野球少年だった私の個人的経験から言わせていただくと、男の子は、有名野球選手のサイン入りのボールなどに興奮するのです。それと同じような興奮を、自分の名前を英語でサインし、それを友だちと見せ合って、誰のサインが一番カッコいいかを競い合うことの中で感じてくれれば、それは素敵なことではないでしょうか。

私がサインの大切さに気がついたのは、海外語学研修でホームステイをする短大生の事前準備をお手伝いしているときのことでした。ホストファミリーに送る文書の最後にサインをするところがあったのですが、ほとんどの学生がブロック体で名前を書いていました。署名は筆記体であるということを知らなかったのです。

こういう基本的なことを知らないのはその学生が非常識だからだと言ってすませてしまうのではなく、こういう基本的なことは100%、すべての子どもが知るようになってほしいと思いませんか。自分独自の格好良いサインを考えたり、クラスメートの考えたサインや、先生が教室に持ち込んだ有名人のサインを見て、それは誰のサインかを当てたりしながら文字を学んでいけば、文字学習は俄然魅力あるものになるのではないかと思います。

また、小切手社会のアメリカでは、小学校から個人小切手(personal check)を書く練習をさせる所もあります。アメリカでは、店で買い物をする時、運転免許証などの身分証明書を見せ、サインをした小切手をレジに渡して現金と同じように使っています。日本人でも、外国旅行でトラベラーズ・チェックを同じようにして使いますね。小学校で使われている『Hi, Friends! 1』の最初に、名刺交換で自己紹介する活動が出てきますが、小学生が名刺を交換することは、日常生活でも、学校教育の一環としてもまずありません。めったにしないことを体験する活動よりは、トラベラーズ・チェックにサインするというような実用的な活動を、文化学習

も兼ねて取り入れてみるのはいかがでしょうか。

最後に・・・気になる2つの話題

■ 「ブロック体」って？

一つ目は、「筆記体」と「ブロック体」の話。どちらも英語圏での日常生活でいろんな書類の作成に使うものですから、実用英語教育の観点からは大変意味のあるものです。私たちが中学生の頃は、筆記体 *Hiroyuki* の反対は **Hiroyuki** で、これが「ブロック体」だと習いましたが、残念ながら、これは誤りです。英語で「ブロック体」(block letters)で書くというのは、活字体(print letter)の文字を、全て大文字で書くことを意味します。つまり、ブロック体の「ひろゆき」は **HIROYUKI** であって、**Hiroyuki** ではないのです。

小・中学校で子どもたちに名前を書かせるとき簡単に使える英語の指示表現としては、次の4つの表現(1a.~1d.)を覚えておけば十分です。

1a. Write your name in block letters.

2a. Write your name in cursive.

3a. Print your name.

4a. Sign your name.

それぞれの指示の結果はどうなるかを示したものが次の1b.~4b.です(/ は「または」の意)。

1b. **HIROYUKI KUNO**

2b. *Hiroyuki Kuno*

3b. **Hiroyuki Kuno / HIROYUKI KUNO**

4b. *Hiroyuki Kuno*

提出物に名前を書かせる度に、小学校では上の3a.か4a.の簡単な3語文を、中学では1a.~4a.の4種類の文を適度に混ぜながら、繰り返し子どもたちに聞かせていけば、外国に旅行に行つて、どんな場面で名前を書くことを求められても、書き方だけは間違えることなく名前の書ける子どもたちを育てることができるはずで

■ “three alphabets...” ?

最後に「アルファベット」のことです。アルファベットというのは、英語で言えば26文字全体を指します。ですから、日本語で「アルファベットを3つ」という言い方は考えられなくはありませんが、皆さんが思っているのとは違う意味が伝わってしまう可能性があります。英語でそういう言い方をすると、異なる「文字セット」を3つ——例えば、日本語(ひらがな文字)46文字と、英語(ローマ字)26文字と、ロシア語(キリル文字)33文字の3つ——指すことになり、英語の文字3つという意味ではなくなります。文字セットでなく、一つ一つの文字を複数指すときには、“alphabet”に複数形の“s”を付けるのではなく、“letter”(文字)ということばに複数形の“s”を付けて、“three letters”などと言わなければなりません。

小・中学校で人気のゲームに“WHAT AM I?”(や“WHO AM I?”)といった素性当てゲームがあります。誰かが《何か》になって前に立ちますが、その子と先生以外は、その子が何であるか(たとえば“dog”であること)を知りません。クラスメートは、その子に“Are you an animal?”などといった質問をいくつか投げかけ、答えを聞いて、その子が何であるかを当てます。こんなゲームに、“How many letters (does your name have)?—“Three!”のような応答を取り入れていけば、“letter”と言っても「手紙」という意味しか知らない学生の数も徐々に減っていくのではないかと期待しています。

参考文献

天満美智子(1984)『子どもが英語につまずくとき』研究社

山田純・松浦伸和・柳瀬陽介(1988)『英語学力差はどこから生じるのか』大修館

お知らせ

◆ ホームページ開設しました

実用英語教育学会のニュースレターや紀要などがアップされています。

詳しくは右記の URL まで！ <http://spelt.main.jp/>

◆ 会員募集のお知らせ

実用英語教育学会では2013年度新会員を募集しています。年会費は一般会員4,000円(学生, 院生3,000円)です。

◆ 新規入会の申込手続き

e-mailによる入会申込みあるいは郵便振替による会費納入によって、入会手続きを完了することとさせていただきます。e-mailに下記の必要事項をご記入頂き、事務局までご送信ください。※3月まで2012年度の扱いになるため、4月以降の入会をおすすめします。(なお、SPELTのホームページのFORMを使って申込手続きを行うこともできます。⇒お申込用FORMへは[こちら](#))

- ・漢字御氏名 (例： 北海 道子)
- ・ローマ字御氏名 (例： HOKKAI Michiko)
- ・御住所 (郵便番号を含み、都道府県から始めて御記入願います。なお、その御住所が【自宅】か【勤務先】か、【公開】か【非公開】かの別を明記してください。)
- ・御電話 (半角英数でハイフンを付けて下さい。御住所同様、【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別、並びに、【公開】・【非公開】の別を明記してください。)
- ・御所属 (大学生、大学院生の場合は【学生】と明記して下さい。)
- ・メールアドレス (普段からお使いのものを御記入ください。また、携帯電話のメールアドレスはなるべく御遠慮ください。【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別、【公開】・【非公開】かの別も明記してください。)
- ・年会費納入の手続き

学会事務局(下記口座)まで、必ず送金者氏名を明記のうえご送金ください。なお、恐れ入りますが振込み手数料は各自負担とさせていただきます。

【名義】実用英語教育学会

ゆうちょ銀行 記号 19060 番号 10312621

※他の金融機関から振込みする場合

【店名】九〇八 (読み キュウゼロハチ)

【店番】908 【預金種目】普通預金【口座番号】1031262



編集後記

今回は、第2回研究大会の様子をお届けしました。より魅力的な授業を実践するためのヒントをお届けできたのではないかと考えております。次回の研究会は10月開催の予定です。参加してよかった!と感じてもらえるような研究会になるよう準備してまいります。是非、ふるってご参加ください。

実用英語教育学会

編集: *SPELT Newsletter* 編集委員 (石川希美・久野寛之・杉浦理恵)

発行: 2013年3月31日

事務局: 〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。